

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649 FAX(03)3299-5367  
振替 〇〇一〇〇一 九一五八四三一 労金 東京労金本店 No 1154163

購読料 月額 600円 6カ月前納制

### 〈もくじ〉

#### ■巻頭言

世界からとり残される日本

京成労組乗務分会……………2

労働組合への信頼が団結つくる

……………3

— 私たちの二〇〇〇年春闘総括 (二) —

手づくりのスライド作品を上映

佐野 周二……………5

— 「首切り」は納得できない— 国労帯広闘争団・二十一人の十三年—

#### ◆資料と解説◆

臨大「休会」をめぐるさまざまなき動き

……………6

◆資料1 「解決なき臨時大会」の再開に反対し、国労の良心に訴えるアピール(七月十一日) ◆

◆資料2 「休会」の取り扱いに関する申し入れ(二十一闘争団・有志、七月十一日) ◆

◆資料3 「どうぞうだん わっかない」第二四一、七月五日 ◆

◆資料4 臨大休会の責任は組合民主主義を無視し、十分な討論を保障しないまま大会を強行した本部にあります

早期に臨時大会開催を……………8

◆資料5 国労臨大休会に対する声明(佐賀県労働組合会議、七月七日) ◆

最後の「政治解決」へ体制つくれ……………10

◆資料6 国労東京地方本部中央支部第一三回定期支部委員会宣言(七月八日) ◆

納得できる解決える道をさぐれ……………12

◆座談会 総選挙をふり返って(中) ◆

◆選挙区制はやっぱり天下の悪法……………13

◆投稿◆

現代の「長期抵抗・統一路線」つくる……………15

読者からの「おたより」……………16

お知らせ 次号は八月二一・二二号の合併号となります。発送日は八月中旬になります。

# 旬刊 社会通信

NO. 776

二〇〇〇年八月一日号

二〇〇〇年八月一日発行  
(毎月一日・二日・三日三回発行)

## 世界からとり残される日本

先進国首脳会議（サミット）が開始されたのは一九七四年だった。先進資本主義諸国は、この時石油ショック、ドル危機、そしてスタグフレーションに見舞われ、資本主義体制の維持、経済の建て直しで、旧ソ連邦を中心とする対社会主義に対抗する戦線を強化する必要に追い込まれたのだ。したがってサミットは先進資本主義国にとって二つの目的をもっていた。第一は、対社会主義国の共同の戦線を強め、包囲網を形づくること、第二は、資本主義経済の再生をはかることである。

この目的は二つの方向から着手された。資本の論理のよりてつてい化をはかることであり、それは一九七〇～八〇年代、レーガン、サッチャーによる労働組合破壊攻撃となつてあらわれた。日本では中曽根第二臨調である。労働組合の弱体化は一八世紀後半の道具から機械への発展にともなう産業革命と同様、ME（マイクロ・エレクトロニクス）、IT（インフォメーション・テクノロジー）による第二の産業革命をもたらすこととなつた。

ME、ITは資本主義と社会主義諸国間の経済・軍事体制の優劣を明らかにし、自信を失つた旧ソ連邦は内部からくずれた。一九八〇年代から九〇年代の「ベルリンの壁」の崩壊である。これによりサミットの性格は大きく変わった。ITによる資本移動の世界化、投資より投機が中心となつた経済の調整であり、崩壊した旧社会主義諸国の資本主義経済へのとり込みである。

この間、地域経済を包含するさまざまな仕組みがつけられた。アメリカはメキシコ、カナダで北米自由貿易機構（NAFTA）を形成し、今では全米自由貿易機構（AFTA）がめざされる。EUでは昨年ユーロ圏が形成された。ヨーロッパとアメリカに巨大な経済圏がつけられたのである。そして、ユーゴのコソボ問題ではNATO（北大西洋条約機構）が、地域紛争問題への政治・軍事的機構として再整備された。

沖繩サミットはこうした中でおこなわれる。サミットはセレモニーと化した。さらに先進資本主義六ヶ国体制から中国、ロシアをふくむ八ヶ国体制へと拡大もした。当初の二つの目的は形骸化し、サミットは各国の利害の対立を龐大な文書で調整する場となった。沖繩サミットはその姿をあらわにしたのが特徴である。

まず、アメリカはイスラエルとパレスチナのPLO和平を最大の課題とし、サミット前段の外相会談に国務長官を派遣しなかった。中東和平は難行し延長必至というわけで、クリントンの参加すら危ぶまれていることにも明らかだ。

五～六月、朝鮮半島情勢は急激に動いた。南と北が歴史的対話をおこなった。中国、ロシア、アメリカはそれぞれに独自の外交戦略から新たな東アジア対策を練っている。クリントンは沖繩サミットより中国との首脳会談を重視し、国務長官は北朝鮮外相と接触した。ロシアのプーチンはサミット前に北朝鮮と中国を訪問する。朝鮮半島で主導権をとる地理的立場にある日本は「らち疑惑」問題に固執することで、自らの手を縛っている。沖繩サミットは、米軍基地問題を中心に、日本から世界に発信する材料はいくらでもある。しかし、手をこまねいているだけだ。

そのサミットも雪印、そごう、三宅島・神津島でトップニュースから外される。これで

は日本はいよいよ世界からとり残されるばかりである。政治梗塞である。(T)

## 労働組合への信頼が団結つくる

— 私たちの二〇〇〇年春闘総括(二) —

二〇〇〇年春闘方針案オルグ 二〇〇〇年春闘方針オルグが一月二一日に午前、午後二八〇名が結集して開催されました。方針に対して七件の質問がだされました。闘い方について、不満な声が出された。

阪神大震災以降、資本の攻撃に後退ばかりしている。日経連の春闘つぶしに対応ができていない。秋闘でストライキを設定するのに春闘ではやらない。要求額も毎年下がり、職場の声にこたえていない。

「不満なときはストライキ」、私鉄の闘い方を放棄しないでほしい。職場に依拠した闘い方を示して欲しい。四単産合同についても連合に入るときの総括がいかされていない。このままでは、ズルズルなし崩し的に私鉄総連が無くなってしまおうと集約しました。

### 春闘の闘いの特徴点

a、日経連ベアゼロ・連合三%

日経連は、「新時代の日本的経営」を貫徹しようと、「春闘の時代は終わった」「年功型賃金の解消」を前面にして、人件費抑制を臨時総会で採択してきました。連合は三%アップ(ベア一%)の要求をしました。連合の三%に日経連の賃下げの闘いとなりました。

労働者の団結から、勤労国民の苦しい生活実態を前面に押し出し、職場と生活を守る闘いを作っていく方向性が見られません。連合は、日経連の無謀な発言に反発をしますが、覆すまでには行きません。結果的に日経連ベアスになっていきます。ベア要求をしている単産は、横一線にゼロ回答が並び、定昇のみの回答で妥結をしています。

一人平均の回答が見えてきません。これは、私鉄でも同様であり労働者の団結を引き出す条件がみえません。かつて春闘を盛り上げた公労協グループの「NIT」 「JR」等の闘う状況も見えてきません。この数年の春闘を特徴づけている「春闘がいつ始まり、いつ終わったのかわからない」が二〇〇〇年春闘でも繰り返されました。

b、東西格差回答は個別交渉の必然

私鉄は、要求方式から七つのパターンもあり、形だけと認めざる得ない大手労使会議をお膳立てしなけらばならないところに、今春闘の厳しさがあらわれています。私鉄春闘の闘いはあくまでも個別交渉になり、私鉄の団結は舞台裏に隠れたままです。他単産同様に実際の回答額が不透明であり、東西格差、中小との差は開くばかりです。それぞれの単組が頑張ったもの、私鉄の団結が生かされない闘いに終始しました。資本の産別分断攻撃がジワジワ浸透しているところに脅威を感じます。本当の総括が迫られています。

c、臨時給と合理化で揺さぶり

京成においても、自動車支部、本社支部人減らし合理化に絡み、会社はスキあらば合理化とパートナーを狙った攻撃をかけようとしてきました。会社は規制緩和の波に負けないで「勝ち組」へと遮二無二なつて、人件費削減をしようとしています。

「勝ち組と負け組しかない。中間はあり得ない。絶対に勝ち組に」と。その現れが労務

管理の強化で「会社あつての社員づくり」「会社の危機に全社員の協力を」の危機意識の思想攻撃です。これらの攻撃を背景にして、二〇〇〇年春闘の具体的特徴点がありました。

①スト権投票への会社介入、バッテン運動がやられました。乗務、駅務を中心に「会社が苦しいときに〇をつけるな」が現業長、管理職中心に取り組まれた。結果的に六ポイントの賛成率ダウンをしました。

②臨時給に対して、揺さぶりをかけてきました。ゼロ回答から始まり、昨年同額、そして昨年同月数に。総額人件費削減攻撃が本当に迫ったことを感じさせました。

③春闘行動を妨害する動きがより目立ってきました。横断板、ステッカー掲出に対して「掲出はしないで」「回答が出たらすぐに取り外してくれ」等々。

④春闘決戦時期に、五七歳以上の非組合員の賃金一〇%カット通告。

⑤自動車、本社支部合理化問題で春闘を揺さぶってきました。

**成果** 1、一人ひとりの主体性で、横断板、ステッカー掲出、団結腕章着用、計画した交流会が取り組めた。とくに、日刊紙交流は二回目を迎え、七つの職場からの参加があった。参加した仲間からも、「他の職場が身近に感じた」。分会の貴重な財産である日刊紙交流会を今後も拡大発展を目指して行きたい。

2、各組春闘合宿が組の教官部員を中心にした役員の協力体制で公休日に過去最高の参加者があった。「重たい春闘の中でどう頑張るか」の討論がされ、「名札着用問題」「日常の労務管理強化」の議論、「やらなければ、もっとやられる」ことの学習から、「団結こそ俺達の最大の武器だ」とつかんできた。

3、「方向板」(日刊紙)の乗務分会春闘方針に基づいて、統一行動に決められた人数が参加できた。また、積極的な討論と意思統一ができた。

4、「一人ひとりの精一杯の行動」ができた。特に電車支部総決起集会には二三〇名の結集があった。

**課題** 1、会社の横断板掲出妨害に職場からの討論を土台にした怒りの議論と行動が求められる。

2、団結腕章、総連ワッペンの着用が弱かった。特に区内組合員の着用がされなかったことは、全体からの支え、話込みの不足があった。

3、会社の具体的春闘妨害に、毅然とした取り組みが弱かった。スト権投票バッテン運動、横断板、ステッカー掲出等々の取り組みの口を出してくる。これらの問題を職場で議論し、一人ひとりが抵抗できる組織強化が求められる。

4、組織内の交流の拡大が求められる。対外交流に比べ組織内の交流ができていないことに問題意識をもとう。

5、職場の不満が「不満なときはストライキ」がなくなったことに集中している。

精一杯闘って「不満でもアキラメル」のかでは、団結はできない。労働組合の最大の武器は団結である。団結は労働組合への信頼から得るもの。職場の声に耳を傾け、労働組合への信頼づくりが求められる。

(京成労組乗務分会・つづく)

# 手づくりのスライド作品を上映

―「首切り」は納得できない―国労帯広闘争団・二十一人の十三年―

「JRに法的責任がない」とする与党三党と社民党の合意を受け、国労が受諾するかどうかの是非を問う国労の第六十六回臨時全国大会は七月一日、東京・社会文化会館で開かれたが、闘争団・家族の強い反対で紛糾し、休会となった。

この緊迫した情勢の中で、国労帯広闘争団の十三年間の苦闘をとらえたスライド上映試写会が、七月十一日の夜、帯広地区労会館（北海道帯広市）で開かれ、関係者約五十人が参加した。

これは昨年十一月の「とかち団結まつり」で、「闘争団のスライドを作ろう」と呼びかけた藤本幸久映画監督にゆえ、「JRに人権を」「国鉄闘争を勝利させる十勝連帯する会」（代表 斉藤道俊弁護士など四人）と国労帯広闘争団（馬淵茂団長）が半年かけた手づくりの共同作品の発表である。

上映に先立ち、主催者の十勝連帯する会代表の藤本監督は「闘争団の皆さんの十三年間の折おりの気持ちを聞いたり、時代、時代の写真を持ち寄って、自分たちがこの時代はどうだったか、もう一回振り返りながら作った。闘争団としてどうするか、支援の一人ひとりがどうしていくか、立ち返り考えていこう」とあいさつした。

スライドのタイトルは『「首切り」は納得できない―国労帯広闘争団・二十一人の十三年』。

団員から集めた約二百枚の写真と肉声を交えて十三年間を約三十七分にまとめたもの。国鉄での仕事、労働組合との出会い、なぜ解雇されたのか、清算事業団の三年間、なぜ国労で闘い続けているか、団員と家族の触れ合いなど、次つぎに映像と肉声で十三年間の真実を訴えかけている。

JR不採用当時の国労本部の木下栄治青年部長（帯広闘争団）は、この中で「この問題に関して名を捨てたら実も取れないんでないか、おかしいことは、おかしいとみんなが言ってきたことを相手に認めさせるといふことでないと、また同じことが繰り返される心配」と伝えている。

馬淵団長の話。臨時大会の前からの計画でしたが、スライド作りに協力いただいた皆さんの気持ち、二十一人の闘争団員・家族の思いを受けとめて頑張ります。小冊子を早く完成させ、各地でスライド上映をして、闘争団の思い、国鉄闘争を風化させないという立場で地域の場に拡げていきたい。

このスライド作成と上映の反響が大きく、新聞やテレビで紹介され、七月三日のUHBでは、「JRに法的責任ない」を認めるかどうか大会のポイントと紹介し、最後にアナウンサーは「今までの自分の人生が否定されることになる。上が決めても、ハイそうですとはならないのではないかと思います」と話した。

スライドおよびスライドパンフについての連絡先

北海道帯広市西五条南十丁目、国労帯広支部内十勝連帯する会

TEL 0155-23-1762 FAX 0155-25-4500

（帯広・佐野 周二）

## ◇資料と解説◇

# 臨大「休会」をめくりさまざまな動き

国労臨時大会「休会」の報は、全国に波紋を拡げているようだ。本誌への「おたより」にソレを強く感じる。国労臨時大会から四日後に開かれたJR連合大会で、JR連合委員長は、「臨時大会の結末は、協力をえた団体、個人に大きな失望を与えた。今後引き続き混乱が続けるとすれば、もはや誰からも協力を得ることはできないだろう」、「苦渋の選択であっても速やかに解決し、民間企業における労働組合としての運動の再構築を心から期待する」と、恫喝、「激励」する。運輸大臣は「四党合意」決定は、「完全民営化への環境整備の重要なポイント」という。

「休会」後の国労は、続開大会開催をめぐり、激しく動いている。資料1と2は六月二八日の二十一闘争団・有志、「アピール」と国労本部への「申し入れ」、資料3は七月一日の臨時大会経過を冷静に述べる。資料4以下は「大会の早期再開」を求める意見、「今のままでは再開すべきでない」とする意見である。

「休会」以降、東京、名古屋、近畿、九州など全国各地で、闘争団・家族を激励する集いが実行、計画されている。なお、続開大会は八月二六日（土）といわれる。

◇資料1「解決案なき臨時大会」の再開に反対し、国労の良心に訴えるアピール（7月11日）◇

## 国労の仲間と良心に訴える

七月一日の第六六回臨時大会は、大混乱の末、休会となった。この事態を招いた原因は、具体的な解決案も解決交渉の進展もないまま臨大開催を強行し、「JRに法的責任がない」ことだけを決めようとした本部執行部にあり、本部はその責任を痛感すべきである。

本部は、「四党合意」の翌五月三一日に開かれた国会代表者会議の中で、「七月一日を目処にして解決作業の促進を求めていく」「七月一日に予定している臨時大会の中では、法的責任がないことの確認だけではなくて、包括的な打開に向けて努力をしていきたい」と答弁したが、七月一日に至るも、交渉の進展状況、包括的な打開の中身について示すことができなかった。

「四党合意」は運輸省がつくったという自民党の四項目の丸呑みではないか、という疑問に対し、本部がそれを否定してきた唯一の理由は、「自民党・社民党トップの決断」により「平行して解決作業が進む」ということであった。しかし、その、「約束」が実行されないにもかかわらず、本部は、まず国労が、「JRに法的責任なし」を決定し、自らが「国労に屈服を迫るもの」と評価してきた四項目を丸呑みしようとする臨大開催を強行したのである。

また、臨大直前の六月二九日になってようやく「臨時全国大会方針（案）」を決定し、その中ではじめて「解決交渉にあたり、法的責任がないことを認める」「ことは」「苦渋の選択である」という見解を示したことも、この間極めて不誠実だった本部の姿勢を象徴的に表している。

自民党の数の力によって国鉄改革法案が可決され、私たちは国労所属だけを理由としてJRから採用差別を受けた。JRで働きたいという私たちの意思は無視され、権力側の勝手な都合で職場を追われ、労働者としての誇りを踏みにじられ、家族を含めた将来を奪わ

れた。その一方的なやり方に対する怒りこそが、十三年余の闘いの原点である。

当事者に一言の説明もなく「四党合意」を了承し、一度も胸襟を開いて話し合おうとしないまま臨大開権を強行した本部に対し、「私たちの人生を勝手な都合で決めないでください」と叫んだ家族の思いは、私たち闘争団の共通の思いである。私たちは、十三年余にわたり国鉄闘争に支援を寄せていただいた支援、共闘のみなさんの思いを裏切ることはいかない。

労働争議の解決局面では、和解協定書の一言一句に至るまでぎりぎりの攻防が行われる。それは、当該の権利回復のためばかりではなく、解決の仕方や水準が他の争議や労働者に与える影響を考慮するからであり、支援者に対する誠意でもある。まず国労が「JRに責任がない」ことを認めてしまうことが、国鉄方式のリストラが広がりつつある状況の中でいかに悪影響を及ぼし、支援者を裏切ることになるかを私たちは怠ってはならない。

また、国鉄闘争を当該として闘っている他組合への配慮もけつして忘れてはならない。

私たちはいま一度、すべての国労の仲間の良心に訴える。労働組合としてやってはならないことはやってはならない、越えてはならない一線は越えてはならないということ。私たちは本部に強く求める。具体的な解決案がないまま臨時大会を再開する愚を犯してはならないことを。

国労稚内闘争団（団長 池辺 哲司）、国労音威子府闘争団（団長 鈴木 孝）、国労名寄闘争団（団長 西原 順一）、国労旭川闘争団（団長 内田 泰博）、国労深川闘争団（団長 瀬古 勝利）、国労留萌闘争団（団長 田辺 和憲）、国労紋別闘争団（団長 清野 隆）、国労北見闘争団（団長 前北 富雄）、国労美幌闘争団（団長 高橋 修）、国労帯広闘争団（団長 馬淵 茂）、国労函館闘争団（団長 西村 昭英）、国労東京闘争団、国労静岡闘争団（野田 紀泰）、国労筑豊闘争団（団長 土村 学）、国労鳥栖地区闘争団（原田 亘）、国労熊本闘争団（団長 平嶋 慶二）、国労大分闘争団（赤峰 正俊）、国労鹿児島地方闘争団（団長 山内 勇）、国労鹿児島班闘争団（団長 垂脇 道男）、国労川内班闘争団（団長 藤崎 久）、国労始良・伊佐班闘争団（団長 岩崎 松男）、国労志布志班闘争団（団長 鶴巢 繁啓）、国労宮崎班闘争団（団長 松村 秀利）、国労都城班闘争団（団長 新原 俊弘）

## 「資料2 「休会」の取り扱いに関する申し入れ（二十一闘争団・有志、七月十一日）◇ 「具体的解決案提示なき続開大会は認められません」

第六六回臨時全国大会は混乱し休会となりました。本部から直ちに「見解」（本誌七七四号、資料参照）が示されましたが、私たち闘争団、家族の切実な思いを正確に受けとめたものとは言えず、事態の本質を理解したものとなっていません。

いま国鉄闘争は、解決を巡って大変重要な局面を迎えています。このことを否定するものは誰もいないと思います。そうであるだけに、今次「休会」の事態について正しく総括することが問われています。またそのことなしに、本部自らが「見解」で示している「組織に責任を持って態勢の立て直し」とはなりません。早急にその立場での本部の判断と機関指導を求めるものです。

以上を踏まえ、幾つかの意見並びに質問事項をまとめましたので、改めて本部見解を求めます。

### 1、本部の責任は重大



(1)本部はこの間、『四党合意』の受け入れだけを承認する大会にはしない」「解決作業が目に見える形で進んでいることを報告できなければ臨時大会は開かない」と言い続けてきました。にもかかわらず臨時大会を強行したことは、本部自身の約束を本部自らが一方的に反故にするものであり、機関運営上からも許されることではありません。混乱のおおもとと言えます。本部はその責任を厳しく受けとめ自己批判すべきです。

(2)「JRに法的責任なし」は前提条件であるということがはっきりした大会でもありませんでした。方針提案のなかでの解決に向けた具体的な動きについては、「七月三日に政府がJR七社を呼んで採用についての要請をおこなう」ということだけでした。私たちが指摘していた通り「四党合意」文書そのものだったわけではあります。

(3)第六回臨時全国大会の開催は、そもそも無理があつたことについて真摯に本部は受けとめ、改めて闘いの方向性を明らかにすると同時に組織の信頼回復、総団結に全力を上げるべきです。

## 2、国労要求はどうなっているのか

(1)闘争団として確認してきている要求の基本的考え方については、昨年の実態調査に基づいて本部に提出したものを踏まえつつ、現局面を受け改めて基本的な考え方(六/二一闘争団全国代表者会議、全国幹事会)について、闘争団全国連絡会議から本部への質問事項として書面にて提出(六/二三日付)されています。

(2)第六回臨時全国大会での委員長あいさつ並びに書記長集約から言えば、「四党合意」の内容と矛盾が生じます。それは、議案書にも記載されているように「四党合意」を前提としているだけに、要求の根拠が人道的観点からといった曖昧なものとなっていました。しかし、委員長あいさつ並びに書記長集約では、法的責任を前提とした要求(①不採用となつた仲間が原則としてJRに復職、②未払い賃金など経済的な補償、③今後の生活補償を確立する上で名誉回復は勿論のこと多様な要求の実現)の根拠となっています。

(3)こうした矛盾の中で具体的交渉をどのように進めていこうとしているのか明らかにされたい。

## 3、具体的解決案なき臨時全国大会の再開は反対

(1)国労は今、重大な岐路に立たされています。組織の現状や将来展望など、組織を維持する上での厳しい現実、国労組合員であれば誰もが思うことです。だからこそ解決に向かう手順は、数にまかせた形式的な機関運営ではなく、全組合員の真剣な議論が保障されるべきです。そのことなしに本部も事あるごとに言ってきた「闘って良かったと思える解決」にはなりません。

(2)私たち闘争団は、具体的解決案が提示されない臨時全国大会の再開は認められません。本部の見解を求めます。

◇資料3 『どうそうだん わっかない』第二四一号、七月五日◇

## 臨大休会の責任は組合民主主義を無視し

### 十分な討論を保障しないまま大会を強行した本部にあります

JR採用差別事件において、「JRに法的責任がないことを認める」とする第六回の国労臨時全国大会が紛糾し、休会となりました。

見えない交渉・解決水準 この「JRに法的責任なし」とする方針で解決に踏み込むこと



について、全国の闘争団やJRの組合員、支援の仲間から不安の声が上がっていました。JRに法的責任がないことを認めることは、闘いの根拠を没げ捨てることであり、その後の闘いや解決水準は担保がない中では、限りなくゼロに近づきます。

そして何より、当該の闘争団が納得できる討論素材や具体的な解決条件が示されることはなく、大会までの短い期間の中で、時間だけがむなしく過ぎていきました。

不安を抱え、答え求め上京 権内闘争団としては、今までの本部オルグの中では納得する本部の回答が得られず、また、本州・九州のオルグでの三役の答弁が、「具体的なものが無ければ臨大は開かない」「具体的なものが出なくても臨大で決める」と大きく食い違っていたため、このままでは私たちの当該の闘争団の意見が無視された形で決まってしまうのではと不安を抱え、とりあえず団長が六月二七日に上京しました。

上京すると、同じく不安を抱え、本部の答えを求めて全国から闘争団が自主的に上京してまいりました。

合意撤回・臨大中止を要請 六月二八日、上京した全国の二一の闘争団と有志が当該組合員に何の相談もなく四党合意決定が行なわれたことに対して「解決案なき臨時大会の開催中止と四党合意受け入れの撤回」を求めて高橋委員長に申し入れ（本誌七七四号、資料1参照）を行ないました。高橋委員長は「今日中央執行委員会があるので皆さんの意見を報告し討論する」と言われましたが、その後返答はありませんでした。

不安なし！と上村副委員長 六月二九日に、中央執行委員会での討論がどうなったのかの返答がなく、上京闘争団は連絡会を通じて本部に回答を求め、上村副委員長から話をききました。

しかし、明確な返事はなく「そんなでどうするんだ、闘争団の不安にどう答えるのか」という質問に、上村副委員長は、「本部は何も心配していない、不安はない」と明言しましたので、「不安がない」という根拠を具体的に説明してくれ」と要請しましたが、時間切れで逃げるようになりませんでした。

やむなく本部で座り込み 六月三〇日、午前中に中央執行委員会、午後から全国代表者会議が開催されることから、朝に、本部にいた三役に、「本部に不安なし」の理由の説明を求めましたが、執行委員会があるということで逃げられました。こうして本部は、上京した闘争団の要請や不安に一切答えることなく、いや何れも具体的なものが無く答えられないまま、明日の臨大を迎えることになりました。

こうした本部の態度に対し、納得する回答を求めて上京した闘争団は、やむなく本部前で座り込みせざるを得ませんでした。

代議員に闘争団が説得活動 七月一日大会当日、会場の社会文化会館前には、闘争団・家族約一二〇名、JRの国労組合員・国鉄闘争支援者合わせて一〇〇〇名以上の仲間が取り囲み、四党合意反対の氣勢を上げていました。

闘争団としては、何としても大会を中止してほしい思いはありましたが、大会開催の妨害行動は取らず、代議員の説得活動を行なうべく、代議員の通路は開けて大会開始を待ちました。

機動隊を使つても入れない 最初、中央執行委員や三役は、徒歩やタクシーで会場入りしようとしたが、説得しようとする支援者の仲間や闘争団に囲まれ、会場に入ることができませんでした。また、会場には二〇〇名にもぼる警察官と機動隊が導入され、小競り合いも二回程ありました。

その後、本部は大会開催に向けて、具体的な対策も取れず、いたずらに時間だけが過ぎて、大会開催にこぎ着けたのは予定より五時間も経過した六時でした。

大会構成員が入った後、大会が遅れた経過の説明をするということで傍聴者は会場の外で長いこと待たされましたが、後で代議員に聞くと遅れた説明は無かったそうです。

最初から紛糾した臨時大会は一八時に開会されましたが、書記長の提起に傍聴者から大きな声が飛びかい、会場は騒然となりました。賛成・反対双方の意見が出されました。また、本大会で決定せずに継続討議とする修正動議も出されました。

そして、闘争団家族の発言も保障することになり、音威子府の家族が代議員のマイクではなく壇上によじ登って、壇上から全国の代議員・傍聴者に家族の気持ちを切々と訴えました。

その後、議長から、修正動議は挙手で、議案承認は拍手で採決すると告げられました。

自分の大切な一生を曖昧な拍手の採決で決められるのに不安を持った闘争団と四党合意に反対するＪＲ組合員は、宮坂書記長の集約の時に、舞台の方へ殺到しました。賛成の人たちの「やめろ」という声に、ある闘争団員は「俺の人生がかかってるんだ」と答えています。

無理な開催が休会の原因！ あつという間に壇上が占拠され、第六六回臨時全国大会は休会が宣言されました。

今回の壇上占拠には止むをえない状況があったと思います。この間の国労本部の機関運営は組合民主主義を無視して進めるところがありました。突然の「補強案」の提案、「改革法承認」を決める大会運営、そして、四党合意に多くの反対・疑問が出されている中で、それにきちんと答えるどころか、討議資料を出してしつかりとした下部討論も保障しないまま、臨大の開催決定を行いました。また、臨大の騒然とした中において開催を強行した本部の姿勢にこそ問題があります。

自分の人生をかけてきた闘いを上部の決定だけで決められてしまう不安、今日まで政治に騙され続けてきた闘争団にとって、具体的解決水準も示されず、担保なしの政治的解決を受け入れられないのは当然のことです。

呑めばそれで闘いは終わり 闘争団には、もう一度はありません。四党合意を受け入れて解決に向かえば、低い無決水準でも具体的なものが出ればそれで決まってしまう。今回の水準が駄目だから次とはならないのです。そうしたぎりぎりの思いや、このままでは国労に切り捨てられるのではないかという不安などが交錯して、思わず壇上に上がってしまったのは闘争団としては止む終えない行為ではないかと思えます。

大会は休会となり、私たち闘争団は「闘争団として納得する解決」に向けて、首の皮一枚でつながりました。椎内闘争団として、今後とも「解雇撤回・ＪＲ復帰」の長期の闘いが報われる、納得する解決を勝ち取るため全力を上げよう！

## 資料４ 大会休会についての国労北海道本部見解（七月四日）◇ 「早期に臨時大会開催を」

(1) 解雇撤回・ＪＲ復帰の旗を掲げ、十三年有余の闘いで到達をした「政治的解決」に大きな一步を踏み出すはずであった第六六回臨時全国大会は、支援を装った妨害勢力と一部闘争団組合員による大会会場の壇上の破壊と占拠という暴力により休会を余儀なくされま

した。この暴挙ともいえる「壇上占拠」に北海道内の幾つかの闘争団が加わったことは、極めて遺憾であり北海道本部としての責任を痛感するものであります。同時に、関係地区本部の責任も指摘せざるを得ません。

そもそも、この異常ともいえる事態は、「四党合意」受諾の本部判断に反対をする一部組合員と部外の団体が「臨時全国大会阻止」を目的に早朝から大会会場である社会文化会館の入り口を占拠し本部役員、大会代議員など大会構成員の入場を阻止するところから始まりました。三〇度を超える暑さのなか、会場の外で待つこと五時間余り、ようやく一八時をもって開会され本部側からの方針提起、代議員からの発言、修正動議の提出、書記長集約など議事は進められていきましたが、採決の直前になり「壇上への乱入・占拠」が行われ採決が阻止されるといふ最悪の事態を招くこととなりました。

(2)五月三〇日に「J R不採用問題の打開について」、与党三党と社民党の四党で合意が成され、国労本部も中央執行委員会です承しました。この本部判断を巡って、闘争団組合員はもちろんのことJ R職場組合員においても、賛否両論活発な意見が交わされました。

特に四党合意にある「J Rに法的責任無し」を国労が認めるという項については、これまでの闘いの経過と差別に對する怒りから「受け入れるわけにはいかない」との強い意見が闘争団組合員の多くから出されていきました。

本部は、六月一〇日、二三日、二四日と北海道の闘争団を中心にオルグにはいり、四党合意を受諾した報告と本部判断への理解を訴えました。

その内容は、四党合意は「J Rに法的責任なし」を認めることだけではなく、地元J Rへの採用、これまでの賃金保障、雇用対策、そして労使関係の正常化など私たちの要求を政治の場で解決をはかるものということでした。

そして、迎えた臨時全国大会では、本部からこの間の与党の解決に向けた動きに加え、大会終了後の七月三日に運輸大臣がJ R七社の代表を招集し地元J Rへの採用について正式に働きかけることの確約が出来たことについて報告され、全体の理解が求められました。

国労北海道本部も、執行委員会において四党合意を政治的解決Ⅱ和解の第一段階として位置付け、国労が「J Rに法的責任なし」を認めることは、私たちの要求実現と早期解決のための苦渋の選択として受け止めることとしました。

(3)しかし、今回の事態は、四党合意の是非を問うことから大きくかけ離れ、組合民主主義が暴力によって根底から覆されるという問題になりました。

労働組合というものは、方針はもちろんのこと活動、組織、大会等々、その運営については、自らが規約をつくり、自ら決めたことの範囲で行動をするということです。

とりわけ私たち国鉄労働組合は、たとえ少数の意見であっても主張する場が認められていますし、少数の意見を多数に理解してもらおう努力も保障されています。

少数の意見が通らないからといって、暴力をもってそれを通そうということは、組合民主主義に反することは言うまでもなく、労働組合運動では絶対認めることの出来ない行為であります。

ましてや、大会での「壇上乱入・器物の破損・占拠」の行為を直接民主主義の行為として正当化することは言語同断と言わざるを得ません。

(4)国労北海道本部は、引き続き紛争の早期全面解決のため政治的解決の促進をめざし、臨時全国大会が早期に再開されることを求めるとともに、一切の暴力を排し大会の成功に

全力を上げることとします。

## ◇資料5 国労臨大休会に対する声明(佐賀県労働組合会議、七月七日)◇ 最後の「政治解決」へ体制つくれ

佐賀県労働組合会議は、国労が進めてきた「解雇撤回とJ.R復帰を求める」闘いに連帯して闘うために、「国鉄労働者の雇用と人権を守る佐賀県共闘会議」を結成し、今日まで①国鉄闘争に連帯する会への入会、②夏・冬での国労物資販売活動への協力、③大衆集会への参加、④クリーン九州・クリーン佐賀への事業協力等々を各単産・団体のご協力得ながら取り組んできました。又、この闘いを解決させるためにあらゆる場を通じ、関係方面と協議をしながら取り組んできました。今日までの国鉄労働者の不屈の闘いと関係者の取り組みが実を結び、「政治的解決」の状況を作りだしてきたと考えています。

しかしながら、七月一日に開催された「第六六回国労臨時全国大会」が左翼集団と一部闘争団員が結託し、全国大会の開催を妨害し、採決させないための暴力行為があり、大会が大混乱したことに対し、「共闘の立場」から深い憂慮の念を覚えます。そして、これらの行為を正当化するかのような「闘争団のニュース」が発行されています。

したがって佐賀県労働組合会議役員会として、今日の状況を踏まえ、「第六六回国労臨時全国大会の休会に対する態度」を下記のように明らかにします。

「記」

① 労働運動に暴力は無縁であり、大会を開催させないために代議員・役員の入場を阻止し、そして大会の方針を採決させないために暴力をもって大会を休会させた行為は許されないものである。

② これらの行為にたずさわったすべての人たちの猛省を促すものである。

③ 国労の闘いを側面から支援してきた組織として、早急に国労内部で意思統一され、臨時大会を開催し、最後とも言える「政治的解決」に向けた体制作りができるよう要望する。

## ◇資料6 国労東京地方本部中央支部第一三〇回定期支部委員会宣言(七月八日)◇ 納得できる解決える道をさぐれ

一、本部は、四党合意の承認を、臨時大会の統開大会で決めるのではなく、定期大会で賛否を問うのが、正しい組合民主主義であり、そのための議論の時間を保障すべきである。

二、国鉄闘争一〇四七名の解雇撤回の闘いの解決には、当該の闘争団、家族の理解は不可欠であり、そのことを軽視したことが今回の混乱の大きな原因であることから、闘争団との意思疎通を緊密にし、また解決委員会の活用はかること。

三、この間の、到達点、また、ILOの最終勧告や、国鉄改革に伴う未解決問題の法整備、三島と貨物の株上場、整備新幹線の財源問題、更に、来年には省庁の統合問題など、国鉄闘争の勝利解決にとつての有利な材料が多くあることから、今回の「J.Rに法的責任が無い」という四党合意だけが、解決のラストチャンスであると決め付けることなく、納得できる解決を得る為の道が様々ある点についての学習を深める。

四、闘争団、特に、旭川・深川・留萌闘争団への物心にわたる「激進行動」等を取り組む。

## 小選挙区制はやっぱり天下の悪法

「群れて流れる」日本の風土

D 報告では「二大政党制」は幻想と断定されているが、現代の政界再編は「二大政党制」に歩を進めつつあるのではないか。

A 私は近衛文麿の母方の孫である熊本のパカ様こと細川護熙が「革新」対「守旧」の一方での旗頭とされ、細川新党⇨日本新党が結成された時から、民間政治臨調の動向に注意を払ってきた。

民間政治臨調は政・財・官・労・学そして巨大マスコミ、現代社会の上層部を網羅するいわば大政翼賛的組織として形成されてきた経過があった。中心は財と労、具体的には一九五五年に結成された日本生産性本部、一九六八年創立の社会経済国民会議、そしてユニオン連合だ。九四年、社会経済生産性本部となった。その人脈と手法は近くは中曽根第二臨調、旧くは昭和研究会そのものだ。とりわけ驚かされたのは、民間政治臨調の「国家改造」の考え方が、一九三〇年代の昭和研究会の発想の引き写しなんだ。総保守勢力に、大日本帝国憲法下での構想が脈々と受け継がれていることを考えさせられた。

細川、小沢、そして鳩山由起夫君の党はこうした流れの中でつくられている。それを無視しちやいけない、あらゆる可能性を考えなきゃいけないと思うんだ。現に、報告したところにもあるが、自民党と民主党に根本的なイデオロギー的対立はない。旧社会党で労働者、勤労者の気持ちがかかる、たいへんまじめな国会議員の皆さんですら、大臣になるや舞い上がり、下々のくらしを忘れてしまった。彼らはそれなりに哲学をもっていた。しかし、一夜にして投げ捨てられた。

元総理大臣、運輸大臣の村山、伊藤にもいえるのではないか。国労闘争団・家族は連日のように国会請願をくり返し、彼らの意識の変化をつかんだ。だから、組合員・家族は村山さんや伊藤茂さんに心の底では「期待してもムリ」ということを知っていた。それでも必死に請願行動をくり返したのは、彼らの「必死さ」がそうさせたからだ。民主党に移籍した旧社会党議員には「国鉄闘争」への思いもない。群れて流れるだけだ。

今の日本の状況は「群れて流れる」に象徴されるように、原理・原則を失っていることだ。自民と民主にして違いをあげるとすれば、自民は旧来の利権をなんとか維持したいだけ。他方、民主は構造改革、規制緩和促進で新たに利権構造を再編したいとする。財界は大きな変化を望まない。政治の「安定」が唯一の目標となる。だから、経団連をはじめとする五つの団体は、現状維持に胸をなでおろしている。

B 構造改革、規制緩和の矛盾が全世界にあらわれている。民主は二〇年おくれでそれに挑んでる。おそらく、この一二年に世界の流れも変わる。

C JCO、JRのトンネル崩落事故、そして最近の雪印、そごうだろ。危機管理欠如なんていわれるが、これらは「危機管理」以前の問題だ。基本が吹っ飛んじゃった。政治のたるみが全社会に「輸出」されているのが現実じゃないか。緊張感を喪失している。こんな所に「二大政党制」が成立するとは思えない。

A 二大政党制になると思えないのは、地方政治ね。昨年四月の統一地方選を思い出してよ。知事選はすべて自・民相乗り。道府県議で民主はたったの百七十。議席率はわずか六・二％。これに対し自民は千二百八十八で、議席率は四七・七％だ。無所属の七、八割は自民系だから、ここでは自民は七〇％超になる。ところが、政令市を除く市議はといえば最大政党は公明、共産、自民とつづき、民主は四一・五。ぜんぜん問題にならない。どうしてこれで「二大政党制」になるの。

巨大ジャーナリズムは、「二大政党制を小選挙区制で」と、小選挙区制導入に旗を振った。その情性がつづき、事態を正確に認識する能力を失っている。その典型例が自前の「自民圧勝」の世論調査じゃなかったか。

### 小選挙区制度は民主主義そのものを破壊

司会 小選挙区の話が出たが、無所属で岡崎さんの選挙をたたかったCさん、どんな選挙だったのか。

C 第一線にあった立場から、いくつかの点について感想的に提起したい。それは小選挙区比例代表並立制という選挙制度とその下での闘いに関して。確かに私たちは悪法の下で勝ち抜く力をつける必要がある。小選挙区制度は、日本の政治風土では民主主義そのものを破壊する制度である点については力説する必要がある。主権在民、選挙は本来、民衆の声を政治に反映させる最大の制度だが、それが保障されていないところに、現在の政治不信の根底がある。

今回の岡崎選挙は、新社会党が政党要件を失って、初の国政選挙ですし、小選挙区での闘いが厳しいことは闘う前からわかっていた。しかし、聞くと見るとは大違い、実は予想以上だ。

第一に制度に伴うもの。公示直前に街頭から岡崎、そして新社会党のポスターが消えた。掲示板のみのポスターとなった。「岡崎さんは立候補をとりやめたのか」という問い合わせが来る始末だった。

党三役をはじめ、来援があった。しかし党の委員長が街頭演説できない。拡声器を使えるのは、候補者の選挙カー一台である。政見放送はなく、ついでテレビやラジオから、新社会党や岡崎の名前を聞くことはなかった。

司会 アンフェアなんだ。すさまじいね。

C 支援団体や労働組合に協力を要請しても、戦術が限られ合法制を利用した街頭戦術は縛られた。重複立候補不可、全国唯一人の候補者という状況でまだ存在感が薄い新社会党にとって、選挙戦での制限は厳しい。

第二は総選挙自体が「静か」であったということ。シラケとは違う静かさだ。岡崎陣営が選挙戦を盛り上げられなかったといえ、それまでだが、これは小選挙区制度のもつ本質的傾向であると思われる。一つは候補者調整。トップしか当選しない仕組みの中で、与党および野党の候補者調整は政治力学上当然かも知れない。

そして兵庫の場合、自公保の他に連合五党協という与野党入り交つての候補者調整があった。バッジのためには何でもありの調整だ。選挙戦が言論戦（政策論争）になってない。二つに、候補者調整と同じことだが、「選挙に勝つ」ため、政党間の取引きとそれぞれ

の権益団体の組織固めに重点が置かれ、票固めに潜航する傾向が現れる。これが「静かな」総選挙である。投票率が上るといわれながら、微増にとどまったし、無効票もふえた。マスコミの森首相批判と政権選択という誘導もあり、民主党の前進はありながらも、大勢は動かなかった。

今後ますます小選挙区制度の中で、政党の離合集散は激化する。公認権をもつ中枢派閥が力を強めた自民党のように、政治の強権化、民衆からの遊離が進む。そしてますます庶民・労働者いじめの政治が激化することは間違いない。

**司会** 小さな党が選挙をたたかう道はどうか。

**C** わが新社会党に問われているのは、原則的だがたとえば民主党が打ち出した課税最低限の引き下げを容認するような大労組指導部に対して、リストラでいじめられ、福祉、年金、税などで切り捨てられる庶民、労働者を日常的に組織し、運動を作り出していく方向であるし、政治不信の広がりを受けとめる存在感である。難しいがやりきるしかない。それが参院選への展望を切り開くと思う。

岡崎選挙では、お国なまり電話戦術をはじめ、全国的な温かい連帯のとり組みの上に、兵庫での今まで以上の闘いがあった。また、市民運動としての事前の「立会い演説会」、青年の「投票いこう」運動など新たな動きも。

岡崎選挙は勝ち抜けなかったが、多くの教訓が生まれた。厳しい総括の中から次への闘いへ踏み出すことが求められると思う。

#### ◆ 投稿 ◆

### 現代の「長期抵抗・統一路線」をつくる

本日、灰原さんの追悼事業実行員会のパンフを頂きました。まるで、灰原さんが存命のような感激に身を震わしています。

国労本部の更なる絶望的な醜態に灰原さんはどんな感想をお持ちでしょうか。お浄土の灰原さんは、：

「かわのさん、国労本部も大変だね。現場労働者の姿をね、忘れちゃったんだね。でもね、組合員は違うよ。組合員はね。三池はね。労働者を馬鹿にしない！ね。仲間を大事にする、という事だね。決して威張って言うわけじゃないよ。労働組合員不在・大衆不在、日本の労働運動の最大の弱点だね！」と

やや、語気を強められ、その声にはやや怒気が感じられた。でも、それは相手を誹謗中傷する事ではなく、灰原さん自らの総括の声として、また常に自らの民主主義闘争の弱点をのりこえ、労働運動強化展望の声として、腹の底から響くものでありましよう。

灰原さんの遺志を継いでと軽くは言いますが、「長期抵抗・統一路線」という反合理化闘争の基本を自分自身のもとする事は生易しい事ではありません。

灰原さんの周辺には、多くの同志が存在し、その同志が他の多くの同志とつながり、巨大な『反独占・民主主義闘争』の統一戦線を形成しています。

それも、近年では、労農派・社会主義協会にとどまらず、昔年、ややサボリ気味と自嘲されていた新左翼の関係者の方々とも友好を厚くされ、まさに統一路線にふさわしい戦い振りであられたと驚感する以外に表現のしようがありません。



堺先生の『平和革命』にならって、

長期：社会主義 抵抗：反合理化 統一：統一戦線 路線：平和革命

これはもちろん想像ですが、「このような機械的な説明はどうでしょうか」と灰原さんにお尋ねすると、きつと元三池の闘士は「かわのさん、今の情勢にあわせて、もう一度一緒に勉強をしましょうよ」と莞爾（かんじ）とされるような気がします。

（大分・河野 康臣）

## ◇ 読者からのおたより ◇

**国鉄闘争** 政治的解決は今しかなないとゴリ押しする人々。何を解決するのですか？ 人道的な問題？ チャレンジグループの解決、狙いと目的は？ チャレンジグループはどのような解決であれば良いと考えているのですか！？ 明らかに！

（埼玉・W）

**混乱の責任は本部にあり** 四党合意案をめぐる、国鉄臨時全国大会は大混乱となりました。組合員、闘争団の気持ち・声を無視し、強引に物事を決める本部の責任は、はかりしれないものがあります。どんな結果になると、国労としての闘う路線を絶対に守り続けます。

（埼玉・M）

**資料を迅速に** 国労のことが気になりますので、資料情報の確実さと早さの価値が大なので、継続して購読させていただきます。ガンバってください。

（神戸・U）

**あおりすぎ** 国労臨時大会はあおりすぎではないですか。もつといろんな見方や内容の記事も必要だと思います。

（北海道・S）

**編集部より** 事実を忠実にコメントしているつもり。もう少し具体的に指摘ください嬉しう。とにかく情報を 最新号で当分の間 『国鉄闘争』の特集をすること、期待します。地方にいる身では、貴誌の情報が一番早く、一定の分析が加えられていることから、スグレモノです。

（山形・T）

**小選挙区の弊害** 小選挙区制は小政党を排除する選挙制度であることをいやというほど感じました。政党要件のない候補者にとつて幾重にも不利な条件の下での闘いでした。TVや政見放送、ポスター、チラシ、はがき、車…と大政党に比べ大変な差でした。くやしいです。岡崎ひろみさんはじめ、皆様ほんとうにご苦労さまでした。

（広島・K）

**選挙制度に混乱** 選挙制度の無知から来るものですが、今回の選挙について家族に比例区は新社会党と云ったが、いざ投票所に行くとき用紙にはない。やむなく社民党と書いた。参院選は新社会党だ！

（北海道・I）

**健闘に脱帽** 平素のご健闘ぶりにただただ脱帽するのみ。白内障の手術をしました。字が読めるかぎりつづけます。

（東京・K）

**攻撃の本質** 闘争団の方は仲間と共に論議してそれぞれ各自の生き方として選択した道ですから、今後も闘い続けることと確信しています。執行部の方針は変わらないという通知が出されたとか。攻撃の本質を見失わないでほしいと願うばかりです。共にがんばりたい。

（N子）

**Bさんへ** お元氣ですか？ 国労が大変なことになっているとのこと聞きました。今日XさんたちとBさんのお話を聞きに行く予定にしていたんですが、二月に乳ガンの手術を受けたまい休職中として、クソリの副作用でイマイチ調子がよろしくなくて、今日は行けなくなりました。残念…

私はBさんのお話が大好きです。たたかつて、生き抜いてきた人のことは心にジーンとききます。父の作ったおかしさを少し。子どもさんと食べて下さい！

（日教組・Y）

**編集部より** これは国労闘争団Bさんへの日教組組合員からのおたよりです。お許しを得て、掲載させていただきます。

**仲間とともに勉強会** いつも誌を増送して頂き感謝しています。さきの国労関係誌No七七二、七七三、仲間と共に勉強会を重ねてNo七七四誌を七部お願い致します。同封の党の大会で国労問題を私が提案して論議を深めました。全国から支援を頂いた岡崎さん、目的が遠かったです。軍縮の宇都宮さんが亡くなりました。私は『軍縮』創刊から入会しています。

（岡山・K）